

Title	2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム：ポスト悲劇の悲劇：報告
Sub Title	Symposium : Tragödie nach der Tragödie : report
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.168 (213)- 169 (212)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム：ポスト悲劇の悲劇
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポスト悲劇の悲劇

報告

ジョージ・スタイナーの「悲劇の死」宣言（1961年）から約半世紀後、悲劇はドイツ・ヨーロッパの哲学・芸術論においてふたたび議論され始めた。哲学者クリストフ・メンケは著書『悲劇の現代』（2005年）において古代ギリシア悲劇から20世紀に至る戯曲を取り上げ、危機対応の判断と行為こそが危機を招く破綻の構造を解き明かした。演劇学者ハンス＝ティース・レーマンは『アンティゴネー』の分析から、人間の自己主張そのものに自己喪失が伴う構造的矛盾を指摘した。ベルギーの演劇評論家エルヴィン・ヤンスは、厳しいグローバル競争に左右される現代人を悲劇の概念「苦悩する人間」に喩えて、現代社会の悲劇的様相を論じている。

2013年12月12日に三田キャンパスにて行われたシンポジウムは、これらの新しい悲劇論を踏まえて、ニーチェの『ツァラトゥストラ』、バタイユ、ナンシーなどのフランス現代思想を捉え直し、悲劇論の可能性を広げることを目指した。本塾文学部准教授（招聘）マルクス・ヨッホが司会を担当し、ドイツとギリシアから演劇論者を招き、合計四人のパネリストがドイツ語で発表・討論した。以下が発表者と発表題目である。なお職位はシンポジウム開催時のものによる。

ヘレーネ・ヴァロプルー（演劇評論家、ギリシア）

『アンティゴネー』上演における政治、身体、言語との極限的経験

平田栄一郎（本塾文学部教授）

「開かれ」の悲劇——ナンシー、アガンベン、日本の身体演劇を手掛かりに

ハンス＝ティース・レーマン（フランクフルト大学名誉教授）

ポストドラマの悲劇

ヨーゼフ・フェルンケース（本塾文学部教授）

舞台上のツァラトゥストラ？ ― 悲劇とパロディーの（不）整合について

次頁以降のテキストがこのシンポジウムの報告である。そのうちヴァロプルーとレーマンの論考を発表原稿として、平田の論考を論文として掲載する。なおフェルンケースの発表原稿は本人の都合により、掲載を見送ることとなった。